

博士論文の要約

氏 名： 虞 雪健

論文題目： 日本古典文学における中国夢遊物語のアダプテーション

本論文では、「一つの夢が物語全体の骨格を形作り、夢中の世界を遊び回ることを夢見ること」を語るテキストを「夢遊物語」と称し、唐代伝奇の中で特に注目される『枕中記』『南柯太守伝』『桜桃青衣』を三大夢遊物語と分類する。そして、それらの夢遊物語が日本古典文学において、どのように原作から離れ、多様に増殖され、さまざまなジャンルやメディアで創造的に再構築され、断片的に商品化・消費化されるというアダプテーションの過程を詳細に分析する。

第一章では、「夢・夢文化と夢文学・夢遊物語」に焦点を当てる。まず、近代の夢研究の歴史について概観した後、この研究から一線を描く日中における夢文化・夢文学の研究に焦点を当てた、集大成とも言える著書や、最近の研究動向などについて紹介する。さらに、本論文で取り扱う「夢遊物語」の定義を先行研究の夢物語の定義と分類を確認した上で行う。最後に、「夢遊物語」で特に注目される『枕中記』『南柯太守伝』『桜桃青衣』を三大夢遊物語と分類し、それぞれ中国、朝鮮、ベトナムにおいてどのように広まったかについて論じる。その上で、日本における三大夢遊物語のアダプテーション作品の様相を包括的に紹介する。

第二章では、軍記物語『太平記』巻二十六「自伊勢進宝劔事付黄梁夢事」を取り上げ、引用故事「黄梁夢事」を考察する。この章では、まず「黄梁夢事」と「宝劔進奏事」に関する評釈書を参照しながら、典拠の特定が難しい点や、宝劔の真偽に関する議論の限界について検討する。そして、「瑞物」と「瑞夢」の二つのテーマに分けて考察し、巻二十六における虚構という視点から、「瑞夢」は「瑞物」を神器化する手段であることを明らかにする。それから、特定の意味を持つ日数に基づいて、「宝劔進奏劇」が貞和改元以降に計画され、後に起こる崇光帝の即位や政治危機に対処するために積極的に利用されたという、物語の構造を究明する。さらに、中国の黄梁夢の故事が、楚国と洞庭を中心とする『太平記』の黄梁夢事に変容し、夢の空間が平安京の空間と唐土への想像の投影と重なり合いながら、君主の洞庭遊船は煬帝の江都遊船と同様に、「天位五十年」の楽しみがついに「舟中の歌笑」という亡国の音が響き渡るうちに尽きることを暗示する、「黄梁夢事」の方向性を論証する。最後に、『沙石集』の「依和光之方便止妄念事」に記された若僧の夢物語が『太平記』の「黄梁夢事」の筋の発想の一端となる可能性を言及する。

第三章では、「夢中の四季の舞——舞い踊る「邯鄲」——」をテーマとし、まず謡曲「邯鄲」を中心に、謡本の異同を再確認した後、いくつかの重要な詞章上の問題に焦点を当てて分析する。これにより、謡曲「邯鄲」は「始皇帝・咸陽宮・威厳を尽くせる即位」「（穆王、慈童）・菊水・泰平をことほぐ酒宴」「玄宗・霓裳羽衣・歓楽を極める歌舞」という、帝王が求める三つの究極的な栄華の象徴的な場面によって構築され、治世の泰平をたたえ、その永久をことほぐ喜びに満ちた劇的な夢であることを論じる。そして、能「邯鄲」の「夢

中の四季の舞」が、歌舞伎や人形浄瑠璃に与えた影響について言及し、変化舞踊の確立とともに、断片化してアダプテーションされてできた「邯鄲の夢の四季の踊り」の構造を中心に組み合わせられた踊りが、夢の構造や盧生の登場の有無によって、能「邯鄲」本来のイメージの濃厚と希薄の反復を見せながら、立役から女方への完全移行のなかで、女性の盧生の踊る姿が鮮明に浮かび上がってきたことを、番付や絵尽くし、正本などを用いて考察する。最後に、付論として、女盧生の登場を、古典の変奏である「やつし」と「見立」という視点から検討し、浮世絵における女盧生の問題とも関連づけて議論する。

第四章では、「出版流通にともなう夢遊物語」をテーマとし、出版流通と俗文芸創作が相互に刺激し合う近世において、仮名草子や浮世草子では、中国の夢遊物語はどのような様相を呈していたかを、いくつかの注目すべきテキストを取り上げて紹介する。まず、『南柯太守伝』とその影響を受けた作品が近世において怪異小説として広まっていたことを、林羅山の『恠談』の度重なる版行や、浮世草子『和漢乗合船』巻一の二「小造夢^附信州月 美濃国守 槐安国^附南柯郡楽 盤龍岡」などの作品を通じて説明する。そして、怪異小説として理解された「南柯の夢」が、動物寓話を多く含む『莊子』と関連づけられ、日本の動物寓意譚と融合されることを、『恠談御伽桜』巻二の第二「津国蛙合戦」や、『小さかづき』の冒頭記事「夢物がたりの事」を通じて論証する。さらに、近世の出版の発展により、中国夢遊物語が、先行する草子文学とともに新たな草子文学の創作にも取り込まれたことを、『小さかづき』の巻二の第四話「風露先聖、蟻穴に入事」や『杉楊枝』の巻六第二「竹斎夢想^付臨終の辞世」を通じて分析する。最後に、浮世草子では、『勸進能舞台桜』『風流勸進能』のように、謡曲への嗜好を端的に示した作品や、『遊眼嘶不老時宗』『一角仙人四季桜』のように、邯鄲の夢の語りの構造を用いながらも、一段丸ごと邯鄲の夢の内容を忠実にやつした作品などを紹介する。

第五章では、「「夢遊」趣向の草双紙の五十年」をテーマとし、黄表紙以前の1755年から1775年までの二十年間と、『金々先生栄花夢』（1775年）以降の三十年間という二つの時期に分けて考察する。第一時期では、まず黒本、青本、絵本を中心に、既に先行研究で取り上げられた作品について再確認と修正を行い、触れられていない作品については初歩的な調査と分類を行う。特に、黒本『初夢かんたん枕』を取り上げ、「邯鄲の夢」の故事の受容と、江戸時代の対「異国」観やそのイメージの変容について論じる。また、富川吟雪の「夢遊」趣向にも注目し、黒本『浮世楽助一盃夢』、青本『風流邯鄲 浮世栄花枕』、青本『風流仙人花聳』に関する先行研究をもとに、さらなる分析と批評を行う。特に、青本『風流仙人花聳』が、夢の語り構造があるにもかかわらず、実際には浮世草子『風俗遊仙窟』を素材に創作された「遊仙窟物」であることを論証する。第二時期では、『金々先生栄花夢』によって切り拓かれた『栄花夢』の模倣の風潮を概観する。そして、第三章で論じた「邯鄲の四季の舞」が黄表紙においてどのようにアダプテーションされたかを紹介する。最後に、「浦島物」や竜宮に関連する民間伝説などが、「邯鄲の夢」とどのように結びついたかを、いくつかの黄表紙作品を通じて論証する。

終章では、各章の内容を振り返り、簡潔にまとめる。そして、特に中小型類書や詩註などの漢文学の受容が、より高度な自由度と創造性を許容する基盤を提供した点、および異なる時期のアダプテーションが影響し合い、進化してきた事実など、アダプテーションの観点から明らかにした点を論述する。最後に、研究の限界と今後の課題を提示する。